カリフォルニアの空

「人が人として幸せであるために最低限必要なものを一つとりあげるとしたらなにか」

最近読んだ若い流行作家の小説のあとがきにこのような疑問が投げ掛けられていた。お金か、信ずるに足るイデオロギーか、国民をまもってくれるゆるぎない国力か。それとも愛してくれる誰かの存在か。最低限必要なもの、それを若い女流作家は「自由であること」ではないか、といっている。自由を奪われた状態ではたとえ何をどれほどもっていたとしても人は心底幸せになることは出来ない。彼女は有無を言わさず自由を奪っていった戦争についてもっと語りつぐべきだと述べている。

戦争は自由を奪うと同時にもっと大事な人の命をも奪っていった。幸福である条件は人様々であろう。しかし、万人に共通して人間を不幸にする最大の要因は「愛するものを失うこと」。戦争でわが子を失った母親たちの怨念を私たちは決して忘れてはいけない。二〇一一年、東日本の「三・一一」の大災害によって、瞬時にして肉親、知人を失った人たちの悲しみを分かち合っていくべきである。愛し、必要としているものは普段は空気のようにさりげなく無意識に存在している。しかしそれが失われたとき、私たちは慌てふためき、気も動転し、そのものの持つかけがえのない存在を痛いほど知るのである。母親にとって最も愛するもの、それは子供

であろう。わが命に代えても守りたいと念じる子供、それが失われるかもしれないと予想したときの恐怖ほど人を絶望のどん底に陥れるものはない。そして「最大の不幸」という名の奈落は、ある日突然雷が落ちるようにやってきて、それまで平和だった日常を一気に破壊するのだ。

ここ数日続いている小春日和の穏やかな日と同じように、その日も晴れ渡った一二月の夕暮れのことであった。日展（日本美術展覧会）の美術工芸の参与でもあり、「漆絵」の大家である同郷の知人から、秋に行われる日展の招待状を頂き、初めて乃木坂駅近くに開館した新美術館にでかけた。廊下は天井までの吹き抜けで、壁一面がガラス張りのモダンな雰囲気はむしろ意外であった。美術館といえば、ひんやりした石造りの、重々しい薄暗い室内と思い込んでいたので大いに面食らったが、これが現代風の建築なのだろう。広々とした明るい部屋の壁を覆い尽くすような数々の大作に圧倒された。一作ずつ彼の説明を受けながら美術工芸の絵画、彫刻などを観賞し、その後、同行した仲間三人と銀座並木通りのレストラン「梅の花」で食事をし、歓談をしていい気分で帰宅したのは5時すぎであった。一二月の日暮れは早く、もう外は夕闇がたちこめている。気ぜわしく家にたどり着き、キッチンでのんびりとお茶を飲んでいるときであった。電話が鳴った。受話器をとるとアメリカ在住の長女エリである。

サンフランシスコとの時差は十七時間、今頃シスコは夜中なはずなのに、といぶかって受話器を持つとエリは「こんな時間に悪い知らせで申し訳ないけど、（と一寸言いよどんで、）実は今日病院にいって卵巣がんという診断を受けてきたの、今こちらは夜中の三時だけどとても眠

られないから電話をしたの」という。え？まず疑問。突然の宣告になにか重い鈍器で頭を殴られたような、目の前がまっくらになって深い穴に落ちていくような表現しがたい打撃をうけて言葉を失った。どうして？　渦巻きのような「？マーク」がめまいのように襲ってきた。

エリは日中、私宛に何度も電話をかけたという。いま、日本時間では夜の七時だが、サンフランシスコは真夜中の三時。自分ひとりではその重荷に耐えられなくて早く母親に知らせたかったのだろう。しかもエリの説明によると病状は予断を許さないものだった。腹水がたまってお腹がせり出し、病院に行ったらしいが、すでに他の臓器に転移し、かなり進行した状態だという。それに続く幾度かの電話で、癌の転移の範囲が大きいので手術の前に三クール、抗がん剤治療をやり、ある程度広がりを縮めてから手術をするように方針がかわったという。癌だと聞いただけでも驚きなのに、そこまで進行しているなんて、信じがたい思いだ。

「卵巣がん」というあまり聞きなれない病気について、あわててネットで調べてみる。初期に発見すればほとんど完治するらしい。しかし卵巣は沈黙の臓器（サイレント・キラー）でかなり進行しないと症状が現れないもののようで、自覚症状が出て診察に訪れたときはステージⅢ、Ⅳという絶望的な段階になっていると言うことだ。エリもまさにそのような病状で、腹水がたまって初めて異常に気付いたらしい。

つい四、五ヶ月前の七月（二〇一二年）、二人の孫を連れ、学校の夏やすみを利用して来日し、私が股関節の手術をするために入院するのを手伝ってくれたばかりではないか。あのときの元気で行動的な様子を思い出し、どう考えても納得できない。まさか、まさかといいよどむ。

エリはしっかりした口調で伝えてくれたが、彼女の夫のスティーブも大変なショックだろうとおもう。小学校五年と中学一年の二人の孫は事の重大さをわかっているのだろうか。

思えば、二〇一二年の夏は我が家にとって、例年にない様々な出来事があった。カリフォルニア、サンノゼのＩＴ関係の会社に勤務するエリの夫のスティーブが七月から翌年三月までの半年あまり日本勤務（名古屋）になり、そのこともあって、エリと二人の孫、ビビアンとアンジェラが一緒に来日して七月から八月にかけて一ヵ月半ほど我が家に滞在したこと。繰り返すがエリの手助けを当てにして、この機会にここ数年病んでいた変形性股関節症の手術をしたこと、私にとってはお産以来の入院であり、エリは実によく私をフォローしてくれ、大いに助かった。

快気祝いは近くのフレンチレストランで親しく付き合っている友人も招いて七人で賑やかにやった。スティーブもあまり上手でない日本語でご機嫌だった。

エリは実によく動いた。元来がじっとしていられない性格で、絶えずなにかやっていないとおちつかない様子で、もう年（四十八歳、日本では年女という）なのだからあまり動くと疲れるわよ、といっても持って生まれた性分で二人の孫に対しても、ピアノをひけとか、フルートをやれとか、いちいち指図をして叱咤激励する。教育ママぶりを発揮しているのだが、元気な様子からはとても癌などが忍び込んでいるとは想像さえできなかった。

突然の知らせで私の頭は月並みながら真っ白になった。「まさか自分の娘が……」。

「一寸先は闇――」とはよく聞く格言だが、まったく人生いつ何が起きるかわからない。日

常の小さな不満を蒸し返してはぐずぐずと日を過ごしていた私は、瑣末なことは吹っ飛んでしまった。パソコンの前に座ってほとんど無意識に何度もネットで「卵巣がん」を調べる。発見されたときはほとんどが進行がんで、予後は悪いとのこと。ステイーブから東京に住む次女宛に、アメリカの主治医からの診断書のコピーが送られてきているが、英語で書かれた医学の専門用語の羅列がコピー紙に三枚、ほとんど理解できないと次女は根をあげてしまった。腫瘍を縮めないとこのままでは手術できないくらい病巣が広がっているというステイーブの説明は「もうだめかもしれない」という想像しがたい恐怖をもたらす。胸がどきどきしたり、胃が痛くなったり、食欲も湧かない。毎日のように電話をかけてくるエリの言葉に一喜一憂する。腹水がたまって苦しいこと、息をするのも大変と言うことは胸水もたまっているということか。腹水の中に癌細胞は頒布されているという。癌の大きさは１１センチ、急激に進行するという卵巣ガン。想像は最悪の方向へと導かれていく。すでに八十歳ちかく、今後何年あるかわからない私の余生には、もう心の底から笑うという幸せはないのだろうか。

離れて住んでいるときは、健康で無事に暮らしていればそれでよしとして、普段はあまり実感しないエリの優しさや賢明さがあれこれ思いだされてとてもじっとしていられない。涙など忘れるくらい遠い過去のものだったのに、突然あふれてくる。

東京に住んでいる次女ナミと一緒に渡米することにして予定を組んだ。彼女は正社員として仕事を持っていて自由に休むわけに行かない。大学生と中学生の、二人の子供の母でもある。時間を調整し、やっと三日間の休暇をとり、土、日曜日とあわせてあしかけ六日間の予定で一

月中旬、サンフランシスコに飛ぶことにした。私はもちろんアメリカに残り、しばらくエリと一緒に暮らすことにする。

十八年前に私は夫をすい臓がんで見送った。夫は六十一歳であった。早すぎる、と皆泣いた。忘れもしない五月十三日、夫は入院中だったが私だけ主治医に呼ばれ「あと半年」と余命を宣告された。それまで二年の闘病生活があったのである程度の覚悟は出来ていたが、夫には告げず、一人私の胸にだけ秘めておくにはあまりに事が重大であの日々の心労を思い出すと今でも心臓の鼓動がはげしくなる。夫の生命の灯が少しずつ薄れていくのを冷静に見守っていくことの辛さ、むなしさは滓のようにいつまでも胸のうちにわだかまって消えることはない。長年連れ添った夫婦の場合、先に逝ったほうがどれだけ楽かということを何度も思った。今はエリと一緒に暮らしてはいないのだが、これからあの時の苦痛を再び経験することになるのだろうか。

長女エリは一九九九年、ポーランド系イギリス人の夫、スティーブ・ロスと一緒にアメリカ、サンフランシスコに渡った。横浜にある外資系のＩＴ企業の会社に勤務していたスティーブと知り合って職場結婚したのだ。エリ、三十五歳、四月――日本の満開の桜に見送られ、数枚の記念写真をのこして去っていった。私は神奈川の奥地の古くて大きな家に一人残されたが、当時まだ六十代、彼らを信じ、またアメリカにたいする好奇心にどっぷりと浸かっていたので淋しさはあまりなかった。七十代はじめにかけて数回渡米してエリのところに滞在し、アメリカ

の生活の一端を経験することになる。二人の孫――ビビアンとアンジェラの誕生の時も渡米してアメリカと日本の出産の違いも経験した。いつも冬の季節で、温暖なカリフォルニアの気候は大変に過ごしやすく快適だった。

しかし、私にとってアメリカはやはり「サイトシーイング」（観光）の土地でしかなかった。エリにとっても自分で望んだこととはいえ、異国の地で子供を育て、学校やお稽古に通わせ、様々な社会との付き合いの中での生活習慣の違いなどでストレスもあったことだろう。学校や会社関係などで知り合った主婦の仲間同士でそれぞれの家庭に招待し合い、アフタヌーンティを楽しんだりして、私も仲間に入れてもらったが、お互いに自分で作ったクッキーやケーキなどを持ち寄り、おしゃべりをして親睦を図っていた。日本人の女性同士でアメリカの「和食」の店にも行った。最初にスープ感覚で味噌汁がでて、そのあとでメインの料理が出るのもほほえましかった。

「個人」を重んじるアメリカの家はゲストルームや寝室などにそれぞれシャワー室やトイレが備わっていて完全に独立している。広々としたキッチンやリビングルームにはフンダンに日光をとりいれ、日常生活を快適なものにしている。中流の家庭でもその規模は、日本の家がまごとのようにおもえるほど大きく豪華だ。

しかしアメリカは高齢者にとって決して住みよい国とは思えないのだ。大規模のショッピングモールが方々に点在して、店内を歩くだけでも疲れてしまいそうな大型スーパーに品物は豊富だが、自宅から徒歩でいけるような距離ではない。先ずは自動車の運転が出来ることが生活

の前提条件となっているのである。子供の登下校は車での送迎、お稽古事も同様。外出はほとんど車依存である。ハイウエイに限らず、広い道路を矢継ぎ早にスピードをだして通り過ぎていくすさまじい車列を見ていると、本当にアメリカは車社会なのだと痛感する。

また医療費の問題もある。資産家は高額の医療保険で手厚い医療を受けることが出来るが、保険に入れない低所得者はそれなりの治療に甘んじなくてはならない。オバマ大統領が医療制度を改善するべく努力しているようだが、何事も自己責任のお国柄で富裕層の主張が強いのだ。日本の国民皆保険は高齢者にとって最高の制度だとおもう。私は保険でカバーできる範囲の治療でよしとするつもりだが、それなりの終末期を迎えることが出来ると安心している。

学生時代からある程度英会話をマスターし、通訳ガイドの国家資格を取得し、実際にガイドの経験もあって日常会話には困らないエリにとっても、例えば歯医者に行ったときなど、痛さの説明をするのに一苦労したと話していた。また思わぬところにぽっくりと穴をあけているような民族の違いから来る理解しがたい違和感を埋めていくのは努力以上のものがあったと思われる。女の子にしては珍しいほどの決断力と神経の図太さをもっているエリだから克服できたと思っている。

三歳になった時から親とは別室に寝かせた。エリが生まれた一九六〇年代、「暮らしの手帖社」から出版された『スポック博士の育児書』が私の育児の指針になっていた。核家族で親戚も身内も近所にいない土地で私にとって育児は書物で知ることしか出来なかった。『スポック

博士の育児書』は当時世界的に発行部数が多く、日本でも「育児の聖書」とまで言われるように信頼をもって読まれていた。記憶はうすれてしまったが、ミルクは三時間おき、泣いても抱いてはいけない、抱き癖をつけてはいけない、添い寝は自立心を妨げるからだめ、というようなアドバイスで、赤ん坊にとってはストイックなものであった。しかし、私はそれを信じ、ほとんど抱くこともなかったし、ベビーベッドに寝かせるだけ、ましておんぶすることなどなかった。

三歳になって親の寝室から離し、一人別室に寝かせ、泣いても抱いてあげなかった幼児の孤独を思うと本当にかわいそうなことをしたと反省する。エリは後年述懐していたが、夜中に目覚め、母親の元に行きたくてもいくことも出来ず、暗やみの中、誰もいない部屋で早く夜が明けることを願っていたという話は私にとって衝撃であった。現在、このような育児方針に批判があつまり、スキンシップの重要さが誇張され、出来るだけ抱いて育てるようにと強調されているようだが、育児に関して社会の指針が時代によってこれほど異なるのも不思議である。子供に対しては親が自然の感情の発露で接するべきものであろうと今では気付いている。

ほとんど抱いたこともなく育てたエリは、おかげで大変に自立心の強い人間に成長し、さっさと親の傍をはなれ、就職と同時に独立した。いつも厳しい顔であまり優しさを見せなかった親に対してもさしたる反抗の時期もなく世話の焼けない、いい子として育っていったエリであった。

成田からユナイデット航空で九時間あまり、日本発一七時一〇分、時差の関係でサンフランシスコ空港に着いたのは十一時ごろ、エリの夫のスティーブが空港のロビーに迎えに出てくれていた。うろたえて、一刻も早く情報を聞き出そうとする私の質問に対してスティーブはとても沈着であった。広がった病巣を抗がん剤で小さくし、三月の半ばに手術をして、とりきれなかったガンをまた術後に抗がん剤でたたくこと、一連の治療は七月ごろまで続くとおもわれるという予定を聞かされた。彼は理路整然と話し、治ると信じて明るくエリに接しているのだといった。また家族全員もそのようにして支えているのだとも。

久しぶりに会うエリも普段とあまり変わりなかった。髪の毛は抜けていたが（白い帽子を被っていた）抗がん剤の副作用を緩和する特効薬が開発されたとかで強い吐き気もなく、何よりも彼女の精神が安定していることが不思議なほどであった。　世の中にはもっと過酷な状態で病気と向き合っている人もいるのに、私は家族が力になってくれているし、有能なお医者さんを信頼しているから、安心して出来るだけの治療をうけ、あとは運命に任せるだけだと淡々と語った。

アメリカは、がん治療は日本にくらべ数段に進歩しているという。特に抗がん剤治療は日本で認可されていない種類のものでも積極的に取り入れているらしい。私の友人も「アメリカで最高の治療が出来るのだからラッキーね」と言う人もいるくらいだったのだ。私は自分の狼狽振りが恥ずかしくなった。余命を宣告されているわけではない。エリの症状とネットで調べている状態をてらしあわせると、事態は深刻であると判断してうろたえているのだ。思い込みで

あって欲しい。彼女の周りにいる最も近しい家族がこんなにも病人を力づけているというのに、はるか彼方に住む私は、想像に妄想が重なって最悪のことばかり考え、布団の中で泣く日が多かった。もうアメリカで涙は流すまいと自分に言い聞かせた。中学生と小学五年生の二人の孫は父親から母親の病気を正確に説明されたという。食事の片付けはビビアン、洗濯物をたたむのはアンジェラ、家事分担もうまく行って、家庭は平穏であった。

十二歳のビビアンは理数系に能力があるようだ。音楽も大好きでピアノ、フルート、アコーデオンを習っている。アンジェラはお茶目でおしゃれが大好き、学校から帰るとママの傍でお手伝いをしている。サキソフォンのお稽古はいつもママにせきたてられてしぶしぶ練習をしている。二人とも本当にいい子だ。

子育てをし、夫を愛し、平和な家庭を築いてきたエリにとって今回の病気は全く不運としかいいようがないものだったろう。ちょっとした身体の不調で診察を受け、突然進行がんの患者になってしまうという不条理をどのように納得していったのだろう。

納得するまでの心の葛藤は想像以上のものがあったと思う。でも今は平素と変わりなく声も張りがあり、病人とは思えないほど明るい。病気の話題は出来るだけ避けるようにして、ナミともども幼かったころの思い出話に笑い転げたりした。

サンノゼの紀伊国屋書店で買ってきたという日本語で書かれた「食事を通してのがん治療」の本、病人が自分で出来ることは食事療法である。野菜を多く食べること、ストレスをためないことなど。「末期がんからの生還」などとうたった本が数多く出版されていることを知った。

サンノゼはＩＴ企業の関係の会社が多く、日本人の多い街でもある。紀伊国屋書店はレジが日本人で日本語が通用するアメリカでは貴重な書店だ。

エリアには日本のレストランが散在し、「長崎ちゃんぽん」をたべたが、「いらっしゃいませ」と、藍に白地で染め抜いたハッピを着た店員が威勢良く日本語で客に応対してくれる。「リトル東京」のようであった。エリも日常生活は普段と変わりなく、キッチンに立っては好きな料理に時間をつぶして、日本風に二人でうどんをゆでたり、カレーを作ったりした。

自宅から歩いて五分ぐらいのところに観光客も見学に来るという由緒ありげな古い教会があった。入り口に「オールドミッション・サンノゼ」と書かれている。一七世紀、スペイン人が移住してきて開発されていったというカリフォルニアの歴史が様々な展示物と一緒に説明されていた。広い墓地には第二次世界大戦で犠牲になった兵士の墓標もあった。散歩がてらに立ち寄っては、薄暗い礼拝堂の硬い木の椅子に座り、キリストの像にむかってエリの回復を祈った。あるとき、誰もいない室内でぼんやり座っていると、日本人らしい東洋系の若い女性が入ってきて、私には目もくれずに一番前の椅子に腰掛け、十字を切ってそのままテーブルにもたれかかり静かにすすり泣きをはじめた。彼女の薄い肩を後ろから眺めた。きっと異国の地で様々な苦労があるのだろう。留学生だろうか。それとも……。私も一緒に声をあげて泣きたい心境であった。

「祈ること」。無力なものは目に見えない大いなるものに祈ることしかできない。宗教はひ

たすら祈ることによって精神の平安を得るように指導してきた。――悲しいのはあなた一人ではない――これも神の与えた試練の一つなのだと。一緒に祈ることによって彼女と心が通うものがあった。私たちはお互い無言でそれぞれの思いを目に見えぬ神に長い時間語りかけていた――。

「カリフォルニアの青い空」とはよく言われることだが黄昏時、真っ青な空に夕焼けがオレンジの色を掃いた様に地平の丘を染めるとき、名状しがたい悲しみをおぼえる。家も道路も空もすべてが大きいアメリカ。先進国で便利性を追求しているアメリカだが、大きくて、広すぎて子供の学校でさえ車で送り迎えが必要な、不便な国なのだ。ビビアンが所属しているカリフォルニア・ジュニアオーケストラの演奏（彼女はフルートをやっている）を二度聞きに行ったが、ハイウエイを二時間もかけて移動した。スティーブの会社も車で一時間ほどの距離である。隣の家が直ぐ目の前、向かいの家もせまい道路をへだてて手の届きそうなところにある日本の街に住んでいるとアメリカの大地はいかにも広い。

時々、色彩豊かにペンキの塗られた個性的な家が点在する周りの街を散歩する。日本の灰色がかった画一的な面白みのない家に比べればはるかに散歩に値する。たまに、西部劇風な雰囲気の残っている喫茶店に立ち寄るのだが、主婦たちの集まりが多いようで賑やかにおしゃべりに熱中している様子は日本と同じであった。

手術の日が三月中旬ときまって私もまた再渡米するとしても、とりあえず一旦帰国すること

になった。手術となれば入院が必要となるだろう。スティーブのママがイギリス（グラスゴー）から手伝いにきてくれることになっている。私は滞在してもほとんど役に立たないが、英語圏でくらし、車の運転も出来るイギリスのママは大いに力強いことである。

サンフランシスコ一一時一〇分発のユナイデッド航空八二七便で帰国の途につく。「また来るからね」とガレージまで送ってきたエリに手を振る。エリも「是非来てね」と大きく手を振った。感傷はなかった。空港までスティーブに送ってもらった。別れるとき「エリをどうぞよろしくお願いします」と深々と頭をさげた。「日本のママが来てくれてエリは本当にハッピーだったとおもう。ありがとう。」

チェックインをすませて出国審査の入り口に行くまで見送ってくれた。身体検査で引っかかるというちょっとしたアクシデントがあったが（人工関節が問題を引き起こした）、とにかく無事に搭乗できた。機内は満席であった。一点の雲もない青い空にボーイング八二七便は飛び立った。日本に着くまでシートベルト着用の指示のない完璧な飛行であった。座席に座ったとたんに涙があふれた。次々に頬を伝って止めることができない。流れるに任せていたがとうとうハンカチをとりだした。

隣に座った若いアメリカ人の男性が気付いてけげんそうな顔でちらちらと見ている。やがて添乗員が飲み物とおやつのクッキーをくばった。男性は自分のクッキーをペーパーに包み、「プリーズ」といって私の膝の上においた。気を使ってくれたのだ。「サンキュウ。ソウマッチ」とお礼をいい、笑ってみせた。彼も笑った。

エリは漢字で「衣里」と書く。夫が命名した。

（二〇一三年　三月）

オールドミッションサンノゼ

断捨離（だんしゃり）

「魔が差す」という言葉がある。悪魔が心に入り込んだように一瞬、判断や行動を誤るとい

う意味のようである。あのときの私はまさしく魔がさしたのであった。
十畳の書斎の三方を、天井まで作りつけた本棚が本でぎっしりと埋まり、もうこれ以上の置き場所はなく、部屋の真ん中におかれた大きなテーブルの上まで積み重ねるような事態になった。十畳の部屋は物置と化し、収まるべき場所を失った本たちが、床の上にも寝そべっている。足の踏み場もないとはこのことだ。
読みもしないのに小林秀雄の全集、渋沢竜彦の選集、モーリヤック著作集、アラン・ポー、ガルシアマルケスなどなど。
ドアから部屋をのぞいてはため息をついて掃除をすることも出来ずにひきかえす。こんな状態になると本に対する愛着など、どこかへ消えてしまう。いろんな本がどうでもよくなった。「どうせもう読まないのだから」と自分に言い聞かせた。
学生時代から親しんできた神田の古書店、小宮山書店に電話をする。三島由紀夫の資料があると言ったら二つ返事で二人の店員がトラックに乗ってやってきた。学生時代のフランスの小説はもう読み返すこともないだろう。しかし彼らが、「手放したくない本はのぞいておいてください」といったとき、もっと慎重に対処するべきであった。一応、村上春樹と平野啓一郎ははずした。三島由紀夫の自決した当日の各新聞社の切り抜き、週刊誌、初版本、サイン本、ほとんどの作品を網羅している単行本、美装本など、私の心の中で三島由紀夫は過去の作家となったとはいえ、思い切りよく手放すことはなかったのに。
イスラム文化に対して思い入れがあった。キリスト教文化と渾然としているスペインが好き

だった。日本で言う隠れキリシタンのように、レコンキスタによって迫害されたイスラム教徒が地下にもぐって活動した歴史はスリル満点である。また迫害を恐れてキリスト教に回収され、「マラーノ」（豚）とさげすまれたユダヤ人の足跡を訪ねた小岸昭の「スペインを追われたユダヤ人」という得がたい本。それは絶対にとっておくべきであった。

後悔は限りなく続く。処分するまでは惜しいという気持ちはさらさらなかったのが不思議である。思い切りよく二人の男性が、三時間の時間をかけて束ねてトラックに積んでいくのを眺めていても、これで十畳の部屋が片付くと思えば気分は悪くなかった。おまけに手動ミルで引き立てのコーヒーを御馳走して彼らはご機嫌で帰っていった。

平凡社の百科事典と昭和三十年代の筑摩書房の世界文学全集、集英社の現代世界美術全集は売り物にならないと引き取ってくれなかったが、後はさばさばしたもので文庫本にいたるまで綺麗に持っていってくれた。

空っぽになった書棚は違う部屋かと思うほどすっきりしてほっとしたのもつかのま、その夜から六十年かけて私なりにコレクションした本を手放したことがどんなに大変なことか思い知ることになる。

学生時代からこつこつと集めた本であった。女の子らしいおしゃれにはあまり興味がなく、本を買うのがたのしみであった。高田馬場や神田の古本屋街をよくうろついた。注文して取り寄せた本も数多くありそれなりの努力をして得た本であった。

悲しみと後悔はその夜のうちにやってきた。確かにもう読むこともないだろうと思える本も

数多くあった。慎重にそれだけを処分するべきだった。しかしその仕分けをすることも億劫なほど本は溢れていたのだ。
本当に気前よく手放してしまった。最近のお気に入り、伊藤計劃の「虐殺器官」も失ってしまった。五木寛之の初期の名作。早川書房のハードボイルドなど、去っていった本の亡霊にこんなにも苦しむことになろうとは。体の一部が切り取られたように痛い。
今度は本のなくなった書斎を見るのが辛くなった。―私はなんという取り返しのつかないことをしたのだろう――失った本のことが頭から離れなくなり、何をしても鬱々として楽しくない。それがすべて自分のせいなのだから誰を非難するわけにも行かない。小宮山書店に電話をしてから取りにくるまでに一週間はあったのだから、その間に思いとどまればよかったのだ。持ち去られて初めて後悔するとはなんとばかげていることだろう。
二人の娘に愚痴をこぼす。彼女たちは異口同音に「片付いてよかったじゃない。もう読みかえすこともないだろうから整理してくれてありがたいわ」彼女たちはホッとしているようだった。一人で抱え込むのが辛いので、我が家の蔵書を知っている友人知人に切々たる思いを聞いてもらう。元はといえば自分が悪いのだから弁解のしようもないが、あの行為は私の決断などでは決してなく一時的に「魔がさした」としか言いようがない。
優しい友人は「思い切ったことをしたわね」と驚く。自分の持ち物の一番大事なものを処分したのだから、もう後は惜しいものはなにもなく、気持ちも軽くなったでしょう。かえってすっきりしてよかったかもよ、と慰める人が多い。世情は「断捨離」の時代。物を捨てるのにお

金がかかる時代、子供の迷惑にならないようにと老人は身辺を整理する時代である。

文学に興味のないわが二人の娘たちも少しでも物がなくなって安心しているのかもしれない。私も月日が立ったら忘れることが出来るだろうか。読書家の一人の友人は次のように言ってくれた。

「本を買っていつでも読めると思って安心していると結局読まずに『積んどく』ということになる、喪失感で当座は落ち込むが、必ず新しい自分が形成されると思う。自分とは絶えず変化していくもの、心優しく生きていけばまた脱皮して新しい自分がうまれると思う」

その言葉にすがって新しい自分に賭けよう。

（二〇一二年十一月）